上川アイヌのチセ

旭川市博物館

私の祖父川村モノクテは、近文アイヌのコタンコロクル（村長）で、私が生まれた明治三〇年には、いまの旭川市川端町の石狩川のすぐそばに、ササで作ったアイヌの大きな家を建てて住んでいました。

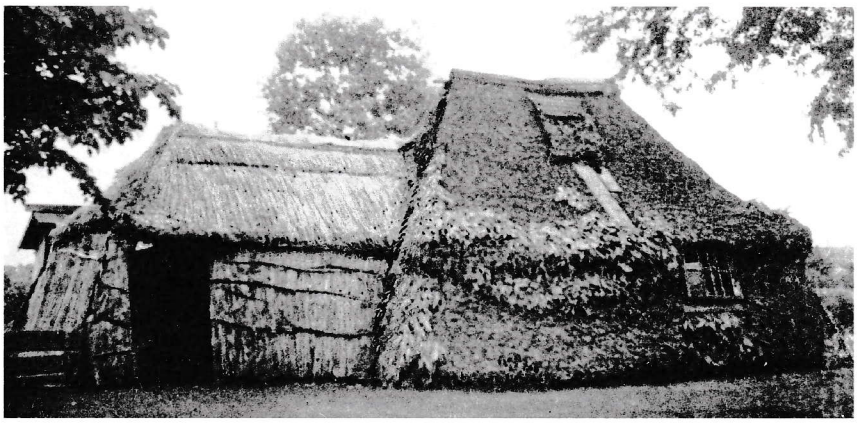
…エカシ（おじいさん）の家が大きく立派だったことと言ったら、子供心に、こんなに大きな家をどうやって作るのだろう、と不思議に思ったほどでした。家の南側にある戸口を入ると広い土間があり、その右手の壁に部屋へ通ずる戸口があります。ここに立つと目の前に大きなアペ（炉）が、正面にはロルンプヤラ（神窓）が見えます。家中の床、壁にはフチ（おばあさん）と母が編んだきれいなチタラベ（ござ）がすき間なく張ってありました。

ロルンプヤラは、神から授けられた肉を運び込んだり、儀式の祭具を出し入れするための神窓で、窓の左手の壁には、守り神や祭事の用具、宝物、狩猟の道具類などを納めたイヨイキリ（神棚）があります。

村の大事な儀式は、このロルンプヤラとイヨイキリの前で行いました。正装した四、五〇人の男たちが、ロルンプヤラの前に、横二列に、ごちそうを間にはさんで向かい合って座ります。儀式のあとは、男も女も炉のぐるりに座り、酒を飲みながら夜ふけまで歌ったり踊ったり、炉ぶちをたたいてユーカラをしたり、とてもにぎやかでした。

父が猟で獲物を捕った時にも村中の人が家に来ました。父は狩猟の名人で、よくクマを捕りましたが、必ず、村の人たちにクマの肉を炊いて食べさせたのです。いつも、まず最初に、体の弱い人と老人を呼びました。

砂沢クラ1983『ク スクップ オルシペ 私の一代の話』北海道新聞社



近文にあったチセ